

# 日本映画学会会報

第41号 (2014年12月21日)

The Japan Society for Cinema Studies (JSCS) Newsletter

発行・編集 日本映画学会 (会長 山本佳樹) / 編集長 大石和久

事務局 信州大学人文学部 杉野健太郎研究室内 〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

事務局メールアドレス [japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp](mailto:japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp)

学会公式サイト <http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/> 学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>

## 目次

視点 琉球列島米国民政府 (USCAR) フィルムと占領下の沖縄 — フィルムの概要と調査状況について 名嘉山リサ 2

出版紹介 7

新入会員紹介 7

## ● 視点

琉球列島米国民政府（USCAR）フィルムと占領下の沖縄 —— フィルムの概要と調査状況について

名嘉山リサ（沖縄工業高等専門学校）

戦後のアメリカによる沖縄統治時代に、琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands, USCAR）は統治をスムーズに行う目的でプロパガンダ映像などを制作し沖縄住民向けに上映・放映したが、そのフィルムは沖縄の本土復帰後米国に移送され、現在、米国国立公文書館（National Archives and Records Administration, NARA）所蔵となっている。リストが作成され、公開されてはいるものの、その詳細な全貌は40年間明らかにされてこなかった。筆者は、琉球列島米国民政府によって制作された映像（以下USCARフィルム）を総合的に調査・分析することによって、アメリカがどのような意図で占領政策を遂行したのか、沖縄が戦後どのように復興し社会が変革していったのか、フィルムから見ることのできる琉米関係の諸相などを映画・映像研究の立場から探ることを目的として研究を行っているところである。本論では、USCARフィルムの概要、現時点での調査状況、今後の課題などを報告したい。

### USCAR、USCAR フィルムとは

1945年に沖縄に上陸した米軍は、軍政府を設置し沖縄の統治を始めるが、朝鮮戦争が勃発した1950年に、統治政策の効率化を図るため軍政府から民政府（USCAR）への移行が行われ、1972年の沖縄返還まで存続することになる。<sup>1</sup> 米民政府の広報局情報部視聴覚課（Audio-Visual Branch, Information Division, Public Affairs Department）によって制作されたUSCARフィルムは、ニュース映画、プロモーション映画、テレビドキュメンタリーがほとんどのものである。

USCARフィルムには、USIS（United States Information Service）映画のような目録はなく、いつどのような作品を作りどこで上映したかなどのまとまった記録も現在のところ見つかっていない。アメリカが本国に持ち帰ったフィルムには、1950年代に制作されたものから、1960年代から70年代に制作されたテレビ番組やその素材映像などがあるが、

50年代に作られた『琉球ニュース』など一部の作品は、県内に数か所設置された琉米文化会館などの施設に保管され、復帰後個人所蔵になっていたものもあり、管理保管体制は整っていなかったようである。かなりの数の『琉球ニュース』はのちに琉球放送が所有者から購入し、番組制作などに活用しているようで、個人が所蔵している作品が沖縄県立公文書館に寄贈されたこともあるようである。

前述の米国国立公文書館（NARA）に所蔵されているフィルムは、復帰から20年余りがたった際に、NARAがフィルムの内容を調査した結果、他の所蔵資料との重複があり、処分する予定であった。UCLAなど国内のアーカイブから受け入れを断られたのち、当時開館後間もなかった沖縄県公文書館に声がかかり、寄贈が決定された。しかし、そのNARAで調査を行っていた研究家が、NARAの決定は不当であると訴訟を起し、裁判の結果、沖縄への寄贈は不可能となった。（この件は盛んに新聞で報道されていたようで、当時の新聞には一般の読者から、沖縄に寄贈したほうが、利用者も多く、有効活用されるのではという投稿もあったようである。）いずれにせよ、当時沖縄県公文書館は、アメリカに駐在員を置き、USCAR資料を収集中で、沖縄側の職員によってUSCARフィルムのリストが作られることとなった。フィルムは20年余り手つかずで無造作に段ボール箱に放り込まれていたようで、フィルムが納められていた箱や缶に書かれているタイトルや紙切れのようなメモから、一つ一つ情報を書き写し、リストを作成したようである。完成した「米国国立公文書館所蔵琉球列島米国民政府フィルムガイド」によると、2297本の16mmフィルム、14本の35mmフィルム、5本のオーディオテープ、10冊のノートブックがあり、35mmフィルムのほとんどは『琉球ニュース』で、編集され放送されたとみられる16mmフィルムは300本ほどあり、それらにはタイトルや放送日、担当者などの情報が記録されているとのことである。（それ以外の16mmフィルムは未編集あるいは内容が重複している映像のようである。）NARAからの寄贈が取りやめになったのち、沖縄県公文書館は約100本を複製により収集し一般公開しているが、今後収集する予定はないようである。

USCARフィルムは、統治をスムーズに行うというUSCAR全体の目的遂行の一環で制作されたが、具体的には、琉球列島におけるUSCARの活動を人々に知らせ、米国の活動がいかに沖縄の復興・発展に寄与しているかを強調することで住民から支持を得ようとした。その主なトピックは、「①米国民政府主催の読書週間、青少年科学の日、琉米文化会館での活動等の文化事業、②愛楽園や愛燐園などの施設、③赤い羽根募金・福祉事業に関わる琉球・米国人の活動、④道路・橋の工事現場、⑤水道・下水道・電力施設の建設現場、またはその落成式、⑥離島紹介、⑦高等弁務官の沖縄各地訪問、⑧米軍の琉球住民への奉仕活動や援助活動、⑨米国への留学制度など」（山端）であ

る。プロパガンダ的要素やアメリカの意図はさておき、今となっては失われてしまった復帰前の沖縄の社会的、文化的状況を垣間見ることができる貴重な映像史料でもある。

1950年代に USCAR フィルムは前述の琉米文化会館、公民館、映画館などで上映されていたようだが、那覇の琉米文化会館の管理日誌に一度だけ上映された記録が残されているほかは、現在のところ上映記録を見つげられていない。1959年に沖縄テレビ、1960年に琉球放送が開局すると、USCAR フィルムはテレビの電波にのりようになる。USCAR 広報局は沖縄テレビ、琉球放送それぞれで週に一回 30分あるいは 15分の枠で、『人・時・場所』（火曜、18:30-19:00）、『TV ウィークリー』（月曜、18:15-18:30）という上記のようなテーマを扱った番組を放映した。そのほかにも、特別番組や『沖縄の生産業』という地元企業を取り上げたシリーズなど、いくつかのシリーズが見受けられる。一部のタイトルやシリーズを除き、NARA 所蔵の USCAR フィルムは無声で、その理由は、当時の放送番組は基本的に局で手が空いているアナウンサーが生でオンエアしていたためで、音声がついている作品は、東京などでポストプロダクションが行われた作品とのことである。<sup>2</sup> OTV と RBC の調査によると、これらの USCAR の番組の視聴率は 8~17%で、それほど影響力はなかったとの報告がある (Binnendijk 70) <sup>3</sup>。

#### USCAR フィルム関係者、調査状況、今後の課題

1950年代の沖縄における映画製作については、軍政府時代から演劇、映画、放送に携わっていた川平朝申氏が深くかかわっていたようである。川平氏によると、「戦争のために荒廃した沖縄が日一日と息吹を取り戻して立ち上がる姿は映画に記録するに価値あるものとし、数回にわたって映画製作を企画、意見書を提出した」(217) とのこと、1951年2月には、琉球大学の開学式を、演劇映画放送専門家で、その年早々に情報教育部副部長に昇進したエルモア・サイモン氏と撮影した(川平 217)。民間情報教育部演劇映画課では 35ミリの撮影機を入手したばかりで、サイモン氏がカメラを回し、川平氏が編集監督を務め、日本東洋現像所で現像・録音されることになっていたようである(217)、広報局や『琉球ニュース』との関係は未確認だが、おそらく当時の米国政府職員でフィルム制作に関して大きな役割を果たしていた人物だと思われる。

また、牧野守氏が前述の『沖縄の生産業』シリーズを制作しており、牧野氏によると、ニュース映画及び広報用の短編フィルム作品は、米民政府、渉外報道局の制作部門、視聴覚教育課課長、チャールズ・ダン(民間人)のもと、日本

人のディレクター（川端氏）と二人のカメラマン（上江洲氏、友寄氏）、女性のデスクの計4人のスタッフで製作され、スタジオ作業は那覇の崇元寺境内の琉米文化会館で行われたとのことである（13）。「このチームではテレビ番組『ニュースウィークリー』<sup>4</sup>ばかりではなく、それ以前からの映画館で上映する『琉球ニュース』（約10分）の製作も担当した」（牧野 13-14）とあるが、それを裏付ける当時の資料等もまだ見つからない。

『沖縄の生産業』シリーズは、テレビ映画15分番組として、民政府広報局企画、琉球工業連合会協力、琉球映画社製作で、全部で13作品あり、そのうち6本は沖縄県公文書館が収集している。製作費はUSCARと（琉球映画社の）スポンサーが折半したようで、音声がある作品とない作品がある。構成台本やナレーション台本（手書き）はコロンビア大学所蔵の牧野コレクションに納められている。

USCAR 広報局の職員の大部分は現地採用だったとのこと（吉本 65）、視聴覚課においても、日系人のチーフ（Frank Tanabeら）を除き、地元の職員が番組制作にあっていたようで、フィルムリストなどにも、担当者名（高安、森下、伊波、大城、照屋、上江洲、座安）が記されているものもある。NARA 所蔵のUSCAR 広報局の資料（沖縄県公文書館、国会図書館にもマイクロフィルムで所蔵）の中には職員の出勤簿、撮影のための出張書類、勤務評価表、諸経費の領収書、陳情書なども保管されており、最後にテレビ番組の制作をしていたスタッフの名前や年齢が分かった。テレビ番組9作品については手書きのナレーション原稿がフィルムと一緒に保管されていたようだが、それ以外は保管されていないため紛失したと思われる。

これまでUSCAR フィルムを調査し、まず映像収集の困難さを感じた。一部デジタル化されていない作品があったものの沖縄県公文書館ではすべて無料で容易に複写ができたが、テレビ局所蔵の作品は、部外者が手に入れることは不可能なようで、現存する『琉球ニュース』のすべてを視聴、分析することは極めて難しい。また、米公文書館では、USCAR フィルムの閲覧用コピーがほんの一部しかなく、それらは無料で複製できるが、デジタル化されていないフィルムの場合、1か月にリクエストできるリール数が決まっており、出来上がるまでに少し時間がかかる。外部の業者に複製を委託する場合は、NARA の閲覧用コピーも申請者負担で作製しなければならず、費用が膨大になる。

また前述したように資料がまとまっておらず、情報が散在しているため、検索でヒットしなかった資料の中に目ぼしい情報があったり、ありそうなところになかったりと、情報収集が困難である。さらに、USCAR 資料の中に、フィルムリストにはないが沖縄に関係のある作品のスク립トがあったり、ほぼ日本語の作品の中で、いくつかは英語バージョンのものがあったり、

USIS などの他部署との関連など疑問が多々ある。今後は主要なシリーズの収集を引き続き行い、映像を分析し、USCAR 資料や関連資料の調査をしつつ、残り少なくなっている関係者を探し、聞き取りを行うことが急務だと考えている。

## 註

- 1 USCAR、米民政府についての詳細は、例えば仲本や吉本を参照。
- 2 元琉球放送カメラマンの新里勝彦氏、沖縄県公文書館仲本和彦氏よりご教授いただいた。
- 3 Binnendijk によると、テレビ番組だけでなく広報局の活動全体についての批判が内部からも上がっており、その最大の原因は言葉の壁だった（71）。山口県立大学吉本秀子氏よりこの論文についてご教授いただいた。
- 4 カメラマンの上江洲氏と思しき名前が、公文書館のフィルムリストの『TV ウィークリー』の備考欄に載っており、『ニュースウィークリー』という番組名は見当たらないため、『TV ウィークリー』のことかと思われる。

## 引用文献

川平朝申「映画」『沖縄大観』第一部 記録編－文化（原著、沖縄朝日新聞社編、1953年、復刻版、那覇：月刊沖縄社、1986年）213-17。

牧野守「米民政府（USCAR）期の占領政策とメディア統制」『琉球電影列伝—境界のワンダーランド』特集カタログ（山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会、2003年）10-15。

仲本和彦「米国による沖縄統治に関する米国側公文書館調査・収集の意義と方法」『沖縄県公文書館研究紀要』、第2号（沖縄県公文書館、2000年）49-75。

山端はるな「米国国立公文書館所蔵琉球列島米国民政府フィルムガイド」（沖縄県公文書館、未刊行）。



吉本秀子「米国の広報外交と沖縄—米民政府・広報局に焦点を当てて—」『山口県立大学学術情報』第7号  
(2014年3月)、63-74。

Binnendijk, Johannes A. “The Dynamics of Okinawa Reversion 1945-69.” Gregory Henderson,  
ed. *Public Diplomacy and Political Change*. New York: Praeger, 1973: 1-187.

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費（25760001）の助成を受けたものである。

## ● 出版紹介

- 羽鳥隆英会員（編著書） 児玉竜一監修／羽鳥隆英編 『寄らば斬るぞ！ — 新国劇と剣劇の世界』、早稲田大学  
坪内博士記念演劇博物館、2014年11月刊行。
- 奥山文幸会員（単著書） 『宮沢賢治論 — 幻想へ階段』、蒼丘書林、2014年11月刊行。

## ● 新入会員紹介

- 中井靖子（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻修士課程）日本語/日本語教育/日本  
文化
- 西岡かれん（京都大学人間・環境学研究科修士課程）1950年代アメリカメロドラマ／アメリカ映画とアメリカ文学
- 松坂茉衣子（京都大学大学院修士課程）黒人映画
- 中村能盛（名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程）日本映画論及びフランス映画論